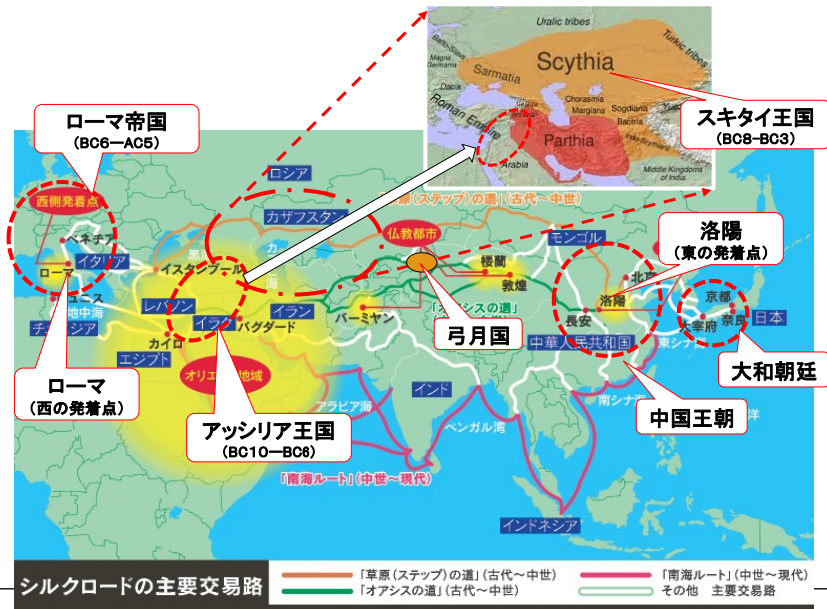


古代史シリーズ9

「大和と平安京を創った人々」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

日高見国にいた神々は弥生時代から東の大和へ移動し、大和朝廷を創り上げていきます。史実では古墳時代からユダヤ系の民、秦氏が時の天皇に仕え平安京造営まで業績を積み上げ、日本人に同化していきます。高天原の神々から平安京までのユダヤ系秦氏の足跡を辿ります。

著者：情報戦略モデル研究所

井上 正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「メーカーのSDやコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。」

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀（以降は「記紀」という）が読めなかったり、古代史は良く分らないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれませんが、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元SDとしてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれませんが。

古代史シリーズ9は、「大和と平安京を創った人々」と題し、平安京造営に大きな役割を果たした秦氏と高天原の神々との繋がりを探ります。日高見国にいた神々は弥生時代から東の大和へ移動し、大和朝廷を創り上げていきます。史実では古墳時代からユダヤ系の民、秦氏が時の天皇に仕え平安京造営まで業績を積み上げ、日本人に同化していきます。高天原の神々から平安京までのユダヤ系秦氏の足跡を辿ります。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

- ＋「日本の起源は日高見国にあった」（田中英道著 勉誠出版）＋「高天原は関東にあった」（田中英道著 勉誠出版）
- ＋「神武天皇の真実」（田中英道、扶桑社）
- ＋「京都はユダヤ人秦氏がつくった」（田中英道著 育鵬社）
- ＋「なぜ八幡神社が日本で一番多いのか」（島田裕巳著 幻冬社）
- ＋「霧島神宮・鹿児島神宮」（デアゴスティーニ）
- ＋「神社に秘められた日本史の謎」（洋泉社 MOOK）
- ＋「古事記」（竹田恒泰 学研）
- ＋「日本書紀」（宇治谷孟 講談社）など

本冊子の古代史シリーズ9「大和と平安京を創った人々」の全体構成は次の目次にあげて置きます。

古代史シリーズ9 「大和と平安京を創った人々」の目次

第一章 「国譲りと天孫降臨」	5
高天原の地上存在と天孫降臨の意味を史実と伝説から捉えていきます。	
第二章 「神武東征の解釈」	19
神武東征の意味と記紀に記述される事柄を高天原の地上存在を前提に解釈しなおす。	
第三章 「饒速日命・神武天皇・崇神天皇」	32
大和朝廷の基礎にあると言われる三世紀の橿原遺跡と神武天皇が即位される紀元前六六〇年との時代のずれを考古学的に探求します。	
第四章 「秦氏が平安京を創った」	43
平安京造営に秦氏が大きく貢献した史実とユダヤ人秦氏が日本の天皇に組み入り、日本に同化した歴史を捉えます。	
第五章 「秦氏と京都の神社との繋がり」	55
平安京造営の影のリーダー秦河勝が作り上げた日本の神社や平安京の祭りに組み込んだユダヤ信仰の印を探ります。	
おわりに	71

◆第一章 「国譲りと天孫降臨」の目次

第一話 出雲の国譲り	5
------------------	---

第二話 常陸国と高天原	11
-------------------	----

第三話 天孫降臨の地、鹿兒島	16
----------------------	----

コラム.. 「鹿兒島神社と霧島神社」	18
--------------------------	----

「高天原は関東にあつた」(田中英道著 勉誠出版)の中で、田中英道氏は高天原を天空ではなく地上に存在したと



版)の中で、田中英道氏は高天原を天空ではなく地上に存在したと述べている。その手掛かりとなる神社が鹿島神宮と香取神宮である。その理由は、記紀で記述する高天原から出雲に遣わされ出雲国を従えたという武御雷大神(タケミカヅチノオオカミ)と経津主大神(フツヌシノオオカミ)がそこに祭神として祭られていることが大きな一つの要因になっている。

武御雷神といえば、出雲の国譲りで有名である。日本書紀からこの国譲りの武御雷神に関する記述を抑えてみます（参照資料「一」）。日本書紀での国譲りの箇所では次のように記述しています。

武御雷神は大国主命に対して、「高御産巢日神（タカムスビノカミ）は、皇孫を降らせこの地を治めようと思つておられる。お前の心はどうか。お譲りするか、否か。」と尋ねる。大国主命は「二人の息子に相談して決める」と応える。その息子、建御方神（ミナカタノカミ）は武御雷神と力比べをして負け、もう一人の息子の事代主神（コトシロヌシノカミ）は「今回の天津神の仰せごとに、父上は抵抗されぬのが良いでしょう。私も仰せに逆らうことはしません。」と言つて、波の上に幾重もの青柴垣をつくり、海中に退去する。

大國主命は、武御雷神と經津主神に対して、「私があなた方を防いだとしたら、国の中の多くの神々もまた、必ずあなた方に向かつて私と同じように防いだでしょう。いま私がこうして隠れましたら誰があなた方に齒向かうでしょう。……」、そう言つて、国を従える時に使つた広矛（ひろほこ）を二神に渡して、「この矛は国を治める時に功勞があつた矛です。もし天孫がこの矛を使つて国を治めるならば、かなら

ず国が穏やかに幸せな国になるでしょう。」と告げる。この言葉には戦えば武力では簡単に負けはしないが、何か高天原の大きな力を恐れて国譲りをしたことが読み取れる。続きを読んでみよう。大国主命は次のように述べる。

「私の子ども、二柱（ふたはしら）の神の言うとおりにこの葦原中国（あしはらなかつくに）は差し上げることにしませう。ただ、天つ神の御子が天津日繼（あまつひつぎ）皇位（みくら）をお受けになる、光り輝く宮殿のように、地盤に届くほどに宮柱を深く掘立て、高天原に届くほどに千木（ちぎ）を高く立てた壮大な宮殿に私が住み、祭られることをお許しください。それが許されるのであれば百八十神（ももやソカミ）を事代主神が統率し、背く神はいなくなります」と。

高御産巢日神は武御雷神と経津主神の報告を受け、自らの回答を伝えさせる。

「あなたの言うことは本当にその通りと思う。……あなたが住むことを希望している天日隅宮（あめのひすみのみや）・出雲大社のことは、いま造り始めましょう。それは千尋藻（ちひろも）の長い縄を使つて百八十の紐に結び、その宮を造る規模は、柱を高く太く、板は広く厚く作りましょう。また備える食物を作り、鳥のように早く走る船も作り、高天原に通うための天安河（あまのやすのかわ）にも内橋をかけましょう。……」。また、

「あなたを祭る宮への奉仕は天穗日命（アマノホヒノミコト）という者に視させます。」と大国主命に返答する。服従する者に対して、有り余る厚遇を施している。出雲王国はそれだけのことをすべき価値を持っていたことを推察させる。天穗日命とは出雲大社の宮司である現在の千家の祖である。

大国主命は、「天つ神の言われたことは、非常に行き届いていて、もう何も言うことはありません。……」。そして、久那斗神（岐神・クナドノカミ、道しるべの神）を二神に推薦し、「この岐神が私に代わつて、あなた方に従い、国々をご案内するでしょう。」と告げる。久那斗神は東国三社の一つである息栖（いきす）神社の祭神として祭られる。

武御雷神と経津主神の二神は久那斗神の案内で、方々をめぐる歩き、従わない者は切り殺し、帰順するものには褒美を与えた。この時に帰順した首長には大物主神と事代主神があり、八十万神を高天原（あまのたかち）に集め、この神々を率いて天に昇つてその誠の心を披露された。天高市とは高天原で諸神が集合する場所になっていた小高い所を言います。

出雲も含めてであるが、出雲以外にも葦原中国には多くの国々があったことが分かる。神武東征前の葦原中国は九州、四国、近畿を中心とした西日本と東日本の近畿寄りまでの国々を支配する王国として君臨し、東北には異なる敵対する国々がいたことが分かる。

「常陸国風土記」の信太郡（しだぐん）の記事には、「これより西の高来（たかく）の里は、老人のいうには、天地の始まつてまもなくのころで、さまざまな者がはこびつていたときに、天から降りてきた普都（フツ）の大神が葦原中国を巡り歩いて、山や河べりに住む荒くれ者を平らげられた」。そして、常陸の国は葦原中国と記述し、この葦原中国の平定には普都の大

神が記述される。葦原中国を平定し、常陸国を創り普都（つツ）の大神が香取神社に祭られたことになる。

そうして、日本書紀は最後に残った香香背神（カガセオノカミ）の討伐を記している。二神の手に負えない悪神であったのであろう。武御雷神は鹿島から約七〇キロメートルの大甕（おおみか・日立市）に住む香香背神の悪神を建葉槌神（タケハツチノカミ）に命じ討伐する。こうして、出雲国、葦原中国の平定が終る。一大文化圏として栄えた高天原と出雲を一体化させる努力をしたのが武御雷神なのである。

記紀で大きく取り上げる「国譲り」とは何であったか、神武天皇即位の前であるから紀元前七世紀以前の出来事と想定できる。当時の倭には二つの大きな勢力を持った国が存在し、国を二分していた。それは出雲を中心とする西日本の勢力と日高見国を中心として勢力を持つ東国の勢力である。東国の日高見国にいた高御産巢日尊が武御雷神と経津主神の二神を遣わして武力ではなく大國主命を屈服させたということは、東国が出雲国を大きく上回る強力な力を有していたことに他ならない。時は弥生文化の導入時期であるから青銅でなく鉄などの金属武器の違いや集団の組織力などが想定できる。そのことによつて「出雲政権を樹立させた西日本の勢力」を「日高見国」の東日本の勢力である高天原の勢力が抑えて政権を統一したということである。国譲りでは、古事記は高御産巢日尊が武御雷神（タケミカヅチノカミ）に天乃鳥船神（アマノトリフネノカミ）を随行させて出雲へ派遣すると記述するが、日本書紀では、武御雷神と経津主神を派遣する。天乃鳥船の船団を使つて海路で出雲に武御雷神と経津主神を派遣したことを意味するのであろう。

しかし、なぜこの時期にこのような大事業が行われたのであろうか？
それは大陸の影響であらう。大陸の事情をみてみると、紀元前一〇世紀ごろの弥生時代初期は、帰化人の増大と水稻栽培の普及により、西日本の人口増加があつた。朝鮮半島を経由しての大陸交流が可能になり始めているのである。東国主体であつた倭国も西日本の重要性に気付き移動を始める。さらに、大陸では、紀元前十一世紀に成立した周王朝が紀元前八世紀に崩れ西周・東周に分割し、春秋戦国時代へ突入する。紀元前六世紀からの春秋戦国時代に続く戦国時代を紀元前二二一年「秦」の始皇帝が統一する。大規模な統一国家の成立は周辺国家への脅威になる。国家防衛を目的とした列島統一事業が必要とされたと考えても不思議ではない。

出雲の遺跡の中で考古学的に非常に重要視されている遺跡に、荒神谷（こうじんだに）遺跡と加茂岩倉（かもいわくら）遺跡がある。重要視されるのは荒神谷遺跡の銅剣と加茂岩倉遺跡の銅鐔の出土の規模による。荒神谷の銅剣埋蔵量は三五八本でありこの埋蔵量は発見までに日本の全遺跡で出土された出土量を上回る。また、加茂岩倉の銅鐔三十九個は一遺跡では最大である。この埋蔵の意味は東国に敗れたことへの恭順であらうと言われている。それは、「武器を捨てる」とい

参照資料1-2: 荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡出土品の「X」印

出典: ウィキペディアから図柄引用



参照資料1-3: 諏訪大社

出典: ウィキペディアから図柄引用



なぜ、高天原は圧倒的な勝利を治めたであろうか？

鹿島の鉄が関係しているのかもしれない。当時の武器として最強である鉄の優位性はなかったかを調べてみましょう。

製鉄の鉄素材には、古代に使った褐鉄鉱（かつてこう）、たたら製鉄で使用する磁鉄鉱（砂鉄）、現代の高炉で使う赤鉄鉱がある（参照資料1-4）。

①。褐鉄鉱は湖沼鉄と言われ、湖や沼に酸化鉄が浮き出て石化したもので餅鉄（もちてつ）、鈴鉄、高師小僧（たかしこぞう）などといわれるものを使う。溶融温度が四百度と低いので縄文時代から使われ製鉄されたと思われる。欠点は材料の収集が自然

う「権力移譲」の意思表示であり、そして祭祀のシンボルである「銅鐸を捨てる」ことになる。まさに、「国譲り」の儀式を表している。三五八本の銅剣は出雲の全神社の数に該当し、全豪族による「剣を下げる」政治的デモンストレーションであった。その理由は、荒神谷銅剣の根元には「X」が刻まれ、加茂岩倉遺跡の銅鐸の人間の顔に当たる部分に「X」が刻まれている。「X」の意味は、武器であれ祭器であれ、もう使わない、使えないものだという意思表示と解されている（参照資料1-2）。巨大国家であった出雲が鹿島を中心とする日高見国（高天原）に恭順せざるを得なかった高天原の強力な軍勢力とは何であろうか。

古事記では、大国主命の子神の建御方神との力比べを記述する。この力比べで武御雷神が「信濃の国の諏訪の湖」の自分の勢力圏に追い詰め、降参させたことが記述される。そして高天原政権の傘下に入った建御方神は降参の絶望を慰めるために諏訪大社に祭った（参照資料1-2）。建御方神との力比べとは武御雷神との戦いで圧倒的な負けを記したのであろう。

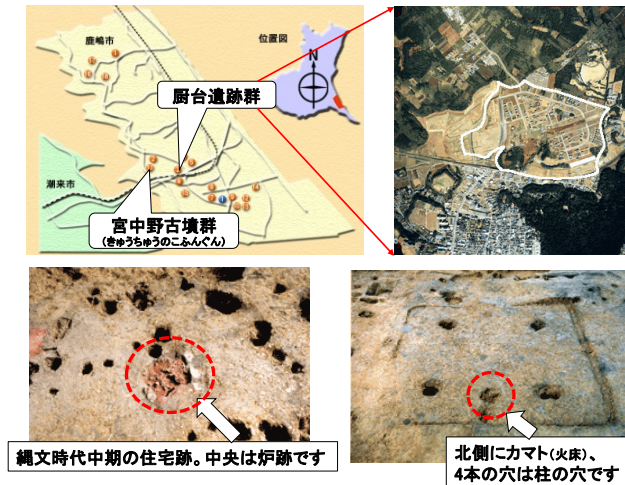
参照資料1-4-①: 古代の鉄

出典:「鉄から見た我が国の古代史」高効率発電システム研究所 吉田敏明



参照資料1-4-②: 厨台遺跡群

出典:ウィキペディアから図柄引用



鉄素材の渡来を見てみましょう。中国では紀元前五世紀に溶融製錬が実用化されている。弥生時代に青銅器と鉄器がほぼ同時に流入しており、石器時代から青銅器時代を飛び越え鉄器時代に突入したと言われている。魏

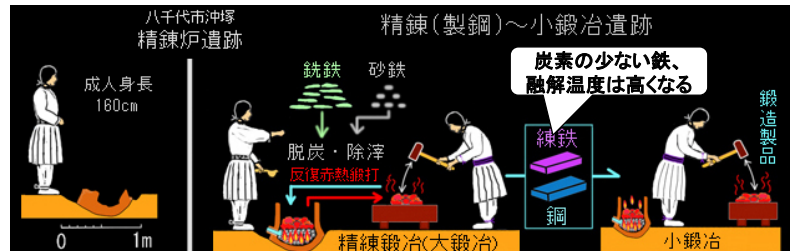
鉄素材の渡来を見てみましょう。中国では紀元前五世紀に溶融製錬が実用化されている。弥生時代に青銅器と鉄器がほぼ同時に流入しており、石器時代から青銅器時代を飛び越え鉄器時代に突入したと言われている。魏

濁鉄の製鉄は、明神平

任せである。その産地の一つである諏訪には諏訪大社の古神事で「湛(たた)え神事」がある。この神事は鈴鉄の豊作の祈願する神事であった。ちなみに、銑鉄の溶融温度は1200度、磁鉄鉱(砂鉄)は1538度、赤鉄鉱(高炉)は1550度に上がり、濁鉄鉱以外はふいごなどの火力増強が必要になる。鹿島界隈の鉄の存在をみると、鹿島神社近くの厨台遺跡群(くりやだいせきぐん)で、縄文中期の炉跡が発見される。炉があれば濁鉄の製鉄はできる。最近発見された遺跡で、紀元三世紀末(古墳時代前期初頭の千葉県八千代市沖塚遺跡の工房跡から火窪(ほど)型炉跡が検出され話題になっている(参照資料1-4-②)。製錬鍛冶(大鍛冶)と鍛造(小鍛冶)がセットになった遺跡である(参照資料1-4-③)。各種鉄関連遺物と多量の砂鉄(Sc)が回収された。銑鉄の鉄滓が出土しているので溶融が出来ている。

参照資料1－4－③：鉄精錬の技術

(1) 千葉県沖塚の大鍛冶と小鍛冶セットの遺跡



(2) 弥生一古墳時代の主な精錬・鍛造遺跡

遺跡名	年代	出土	融点
京都・扇谷	弥生初頭(前10世紀)	鉄滓(溶融あり)	(銅の溶融温度1084.5度) * 湯鉄鉱は400度 * 鉄鉄の溶融温度は1200度 * 磁鉄鉱(砂鉄)は1538度 * 赤鉄鉱(高炉)は1550度
鹿児島・王子	弥生中期後半	鉄滓	
福岡・赤井手	弥生中期後半	鉄塊系遺物	
石川・奥原峠	弥生後期中葉	鉄塊系遺物	
千葉・沖塚	古墳初頭	鉄滓	

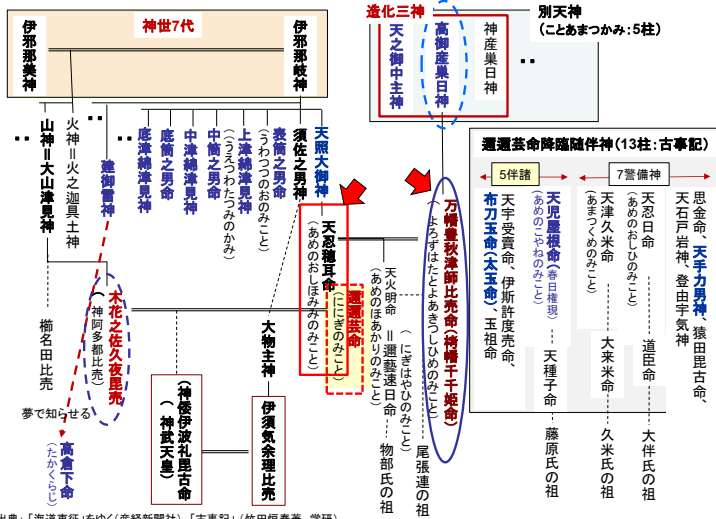
出典：「古代の鉄素材と鍛冶」(ohmura-sutady.net)

書倭人伝から三世紀頃には国内鍛冶は行われていたし、韓国から鍛冶が渡来した。千葉県八千代市沖塚遺跡で精錬鍛冶(大鍛冶)と小鍛冶のセットの工房が検出され、三世紀末であることが確認された。しかし、渡来人が爆発的に増える中で、紀元前五世紀の大陸の製鉄技術開発から八〇〇年もの間、製鉄工人や製鉄技術の伝搬が無かったのだろうか。現在の疑問点・検討事項になっている。

第二話 常陸国と高天原

高御産巢日神（タカムスビノカミ）によって出雲の国譲りに派遣された武御雷神は鹿島神宮に祭られている。記紀には高天原から遣わされたという記述であるから、鹿島を含む常陸国（日高見国）と高天原が関係づけられてくる。この関係を調べてみましょう。高天原の神々の原点は造化三神であり、その中心に高御産巢日神（古事記表記）が記紀に記述される。高御産巢日神から考察してみましょう（参照資料1-5）（参照資料1-5）。

参照資料1-5:高御産巢日神と高天原の関係



出典:『海道東征』をゆく(産経新聞社)、『古事記』(竹田恒泰著、学研)

『常陸国風土記』の記述は、「八百万の神をお集めになったとき、祖先神（高御産巢日神）がおっしゃったことには、「今、わが御孫の命がお治めになろうとする豊葦原の瑞穂の国」とおっしゃった。高天原から下っておいでになった大神は香島（かしま、かぐしま）天の大神という。天においては日香島（ひのかしま）の宮と名付け、地においては豊香島の宮と名づける。……」。鹿島が「高天原から降りられた神の住むところ」と認識されていたのである。

高天原を記述する風土記は『常陸国風土記』だけである。風土記は写本として五つが現存し、『出雲国風土記』がほぼ完本、『播磨国風土記』、『肥前国風土記』、『常陸国風土記』、『豊後国風土記』は一部欠損して残る。

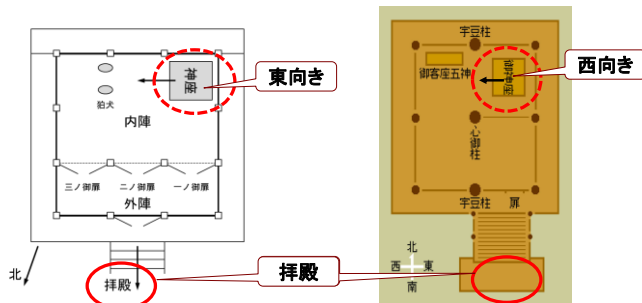
高天原を記述する風土記は『常陸国風土記』だけである。風土記は写本として五つが現存し、『出雲国風土記』がほぼ完本、『播磨国風土記』、『肥前国風土記』、『常陸国風土記』、『豊後国風土記』は一部欠損して残る。

参照資料1-6:東国三社(鹿島神宮、香取神宮、息栖神社)



参照資料1-7:鹿島神宮と出雲大社の神殿

出典:ウィキペディアから図柄引用



鹿島神宮神殿

鹿島神宮の御祭神は、武御雷大神(タケミカヅチノオオカミ)であり、「鹿島神社例伝記」には、神武天皇元年に宮柱を立てられたとある。神武天皇が橿原(かしはら)で即位したその年に、鹿島に使いを遣わして、大和入国を果たしたことを感謝し武御雷神を崇め、社を創設し祀ったと記述する。古事記では、「国譲りの代償として、壮大な御殿を作る」ことを武御雷神が大国主命に約束する。そして、創られた出雲大社の神殿は鹿島神宮と同じ祭神が横向きの形式になっている(参照資料1-7)。両神殿の特徴は、神座が拝殿に対して横向きに座している。拝殿から見て祭神は横顔を見せることになり、この形式は全神社でこの二社のみである。神座の向きは、鹿島神宮が太陽の昇る

出雲大社神殿

鹿島神宮の御祭神は、武御雷大神(タケミカヅチノオオカミ)であり、「鹿島神社例伝記」には、神武天皇元年に宮柱を立てられたとある。神武天皇が橿原(かしはら)で即位したその年に、鹿島に使いを遣わして、大和入国を果たしたことを感謝し武御雷神を崇め、社を創設し祀ったと記述する。古事記では、「国譲りの代償として、壮大な御殿を作る」ことを武御雷神が大国主命に約束する。そして、創られた出雲大社の神殿は鹿島神宮と同じ祭神が横向きの形式になっている(参照資料1-7)。両神殿の特徴は、神座が拝殿に対して横向きに座している。拝殿から見て祭神は横顔を見せることになり、この形式は全神社でこの二社のみである。神座の向きは、鹿島神宮が太陽の昇る

「伊勢国風土記」の逸文には、「天の方向に国があるから、その国を平定しなさい」と勅命をいただいた^注天日別命(アメノヒワケノミコト)が、征伐のしるしとして剣を授かって、東の方へ百里進んだ。…と。伊勢より「東」(東国)に「天」があることが認識されていたことになる。(注 天御中主神(アメノミナカヌシノカミ)の子孫。神武天皇の東征の際伊勢いせを平定し統治したという。皇太神宮大神主の伊勢氏の祖。)

常陸国には出雲の国譲りを成し遂げた神がいる。古事記では武御雷神(タケミカヅチノカミ)と天乃鳥船神(アマノトリフネノカミ)だが、日本書紀では武御雷神と経津主神(フツヌシノカミ)と記述する。この統一事業の立役者は鹿島神宮祭神の武御雷神であり記紀ともに含まれているが、随伴神が若干異なる。これらの三神は東国三社と言われる鹿島神社と香取神社、そして息栖(いきす)神社(茨城県神栖市)に祭られている(参照資料1-7)。東国三社の由緒から三神を捉えてみます。

参照資料1-9: 鹿島神宮 御船祭

出典: ウィキペディアから図柄引用



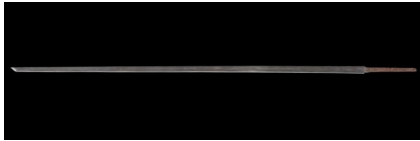
鹿島立ち

息栖神社鳥居



神霊が神域外へ渡御される神幸祭であるが、船で渡御

参照資料1-8: 鹿島神宮の直刀 節霊剣(ツノミタマノツルギ)



出典: ウィキペディアから図柄引用

鹿島神宮と対を成す香取神宮には、武御雷神と出雲の国譲りに立たれた「経津主大神(ツヌシノオオカミ)」が御祭神として鎮座されている。創建は神武天皇十八年と伝えられる。鹿島神宮と同様に、それ以前にも神子神孫(しんしんそん)が奉斎していたであろうことは鹿島神宮と同様である。経津主大神と武御雷神

さらに、鹿島神宮では十二年に一度の聖代(せいだい)に「御船祭」が開催されます(参照資料1-9)。聖代とは、すぐれた天子の治める世のことをいいます。「当社列伝」によれば、「天地も動くばかりにきこゆるは、あづまの宮の神いくさ、天下治めしことは古りぬれど、昔を見する神の御軍(みいくさ)皇軍のこと」と伝えていきます。鹿島神宮から香取神宮に向けて三艘の船を出す祭りです。「天下治めしことは古りぬれど」とは、天孫降臨によつて葦原中国を治らしめたことを表していることを意味します。出雲と葦原中国を治めるために、船出(鹿島立ち)したことを述べていると思われる。

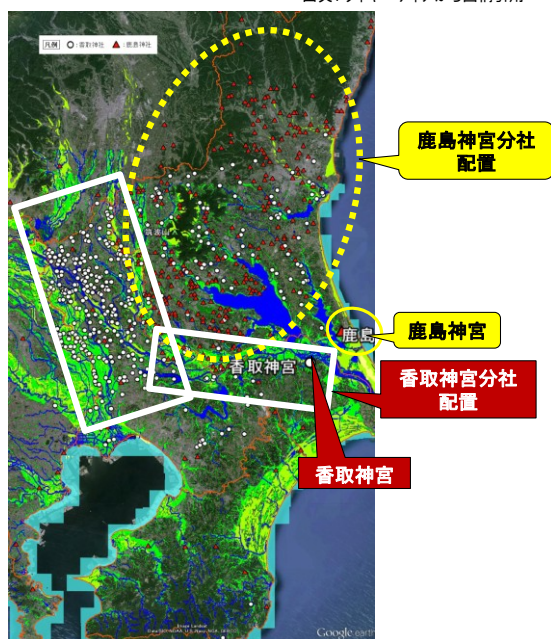
す。イワレビコが東征で使った剣を神格化したものと思われます。

(日の御子)東向きであり、出雲大社は西向きで、祖神である須佐之男命の方向かともいわれる。記紀に記述する国譲りの使者の武御雷神と大国主命の国譲りの代償である宮殿創設が史実として符合することになる。

また、鹿島神宮には国宝の神剣である直刀(ちよくとう)が保存されている(参照資料1-8)。この神剣は二振りあつて、鹿島神宮にあるのは控えの剣とされる。武御雷神(タケミカヅチ)が神武東征の熊野で高倉下を通してイワレビコに授けたものは石上神社(いそのかみじんじや)の祭神になっている。明治時代に石上神社の拝殿の後ろにある「禁足地」から発見されたものです。神武天皇はこの剣を殿内に奉りました。その後、崇神天皇の御代に祭神を石上神社の前身である石上邑に遷したと伝えられています。この神剣である節霊剣(ツノミタマノツルギ)は全長2メートルを超える長大な「直刀」です。イワレビコが東征で使った剣を神格化したものと思われます。

参照資料1-10: 鹿島神宮と香取神宮の分社配置

出典: ウィキペディアから図柄引用



の二神は国譲りで共に出雲に派遣され、出雲と葦原中国を平定する。そして、葦原中国の平定のためにこの二神を案内した久那斗神(クナドノカミ)を祭るのが息栖(いきす)神社である。

息栖神社では久那斗神を主神とし、天乃鳥船命(アメノトリフネノミコト)を相殿神(あいどのしん)として祀る。久那斗神は、道の分岐点で旅人の道中の安全をはかる神として祀られている。鹿島神・香取神による葦原中国平定において、東国への先導にあたった神という。その名前の由来は、『日本書紀』の神話に、伊弉諾尊が黄泉の国で雷神に追いかけられたときに杖を投げ、「これ以上来るな(来なと)」といったので、その杖をクナドノカミと名づけたとあり、名前の由来になっている。天乃鳥船神は、日本神話に登場する神であり、神が乗る船の名前である。詳しくは鳥之石楠船神(トリノイワクスフネノカミ)と書き、鳥が飛ぶように早く、石のように固い楠材で作った船の神を表す。香取神宮のある縄文遺跡・栗山河流域遺跡群から全長「3メートル」の椋木(むくのき)製の丸木舟が出土した。同時代の比較では「5倍から10倍の破格の大きさ」であり、鹿島神・香取神の二神を案内した船もこういった船だったのであろう。防人が鹿島から九州に旅立つことを「鹿島立ち」と言い慣わしたのはここからきている。

武御雷神と経津主神の役割を両神宮の分社配置には興味深い意図が見受けられる。武御雷神は香取神社の経津主大神と共に東国の果てに鎮座される。それは、東北の蝦夷からの守りと日高見国の鎮護にあると考えられる(参照資料1-10)。その理由は鹿島神宮の御分社が東北に扇状に分布していることから北から降る蝦夷に対する護りなのである。一方、香取神社の御分社は下総を中心としていることから関東一円に点在し、祖神の国(日高見国)を守る使命を持ったと考えられ、日高見国を鎮守する神社と捉えられる。

この日高見国には、神奈備山(かななびやま)といわれる筑波山があり高天原との関係が伝えられている。筑波山の旧名は「二神山」あるいは「二上山」と呼ばれていた。その由来に関わる謂れから捉えてみよう。常陸国風土記に、古老曰く、「筑波の地は、古、「紀の国」と謂ひき。…崇神天皇の御世に、注采女臣(ウメノオミ)の友属、筑篁命(ツクハノミコト)を

参照資料1-11:筑波山(二神山)と筑波山神社

出典:ウィキペディアから図柄引用



筑波山



筑波山神社随神門



筑波山神社

紀の国の国造に遣わしし時、自分の名をつけ筑波と称したことが記述される。(注)采女の統括を担当した伴造氏族。采女とは、日本の朝廷において、天皇や皇后に近侍し、食事など身の回りの庶事を専門に行う女官のこと。

筑波山神社は祭神を「筑波男神」、「筑波女神」とするが、「筑波山縁起」や南北朝時代の「詞林采葉抄(しりんさいようしょう)」では、祭神を伊邪那美神・伊邪那岐神とする。筑波山はイザナギとイザナミの二神の山であるとの解釈が付く。また、香取神社が編纂した「香取群書集成」に収録された田植歌には、「あれみなさい、つくばの山のよこも ホーイホイ ヤアホイ よこものしたこそわらかおやくに」と歌われている。筑波山の横雲の下(付近)をわれらの祖国(おやくに)と言っている。伊邪那美神・伊邪那岐神は高天原ではなく筑波山に住んでいたことになる。

日本書紀(神代上)の記述に、「……そこで、一緒に日の神を生み申し上げた大日靈貴神(オオヒルメムチノカミ)天照大御神のこと」という。わが子たちはたくさんいるが、まだこんなに怪しく不思議な子はいない。長くこの国に留めておくのは良くない。早く天に送り高天原の仕事をしてもらおう。……と記述する。

また常陸風土記には、常陸国の鹿島神宮と香取神宮を中心とした地域を理想郷の高天原を体現させる記事がある。

「……春、その村を歩けば、様々な草花が咲き乱れ、かぐわしい香りを放っている。秋、その道を過ぎ行けば、数多くの木々に、錦織りなす木の葉が美しい。此処はまさに、神と仙人が隠れ住んでいるようなところだ。奇しき力を持つ何かが生まれ出づる土地だ。その佳麗な不思議さは、とても書き表すことができない。……」と記述している。

第三話 天孫降臨の地、鹿児島

天照大御神から葦原中国の平定を命じられた天忍穗耳命(アマノオシホミミノミコト)は、生まれたばかりの邇邇芸命(ニギノミコト)を代わりに降臨させるよう上奏し認められる。天照の子ではなく孫が降臨することになった。天乃鳥船神に乗って天孫降臨の途中で、待ち受けていた猿田彦命に会い、不慣れた葦原中国の先導を務めさせる。参考図書の著者の田中英道氏は天孫降臨の場所が鹿児島・霧島の高千穂峰であることから、その道案内をする猿田彦命は鹿児島を良く知っていたと捉えている。猿田彦命は、鹿児島を出発し三ギノ命の天孫降臨を伊勢のヤチマタ(道が八つに別れ迷いやすい処)で待ち受け、岬の知識と航海技術を活用して先導した。

そして、三ギノ命一行は鹿児島に上陸し居住する。それは、次の二点から想像できる。武御雷神に敗れ、傘下に入った建御方神(タケミナカタノカミ)を祭神とする諏訪神社(別名:南方神社)が鹿児島県全神社の十九パーセント(百十社)を占める。また、鹿児島県始良郡隼人町にある「天降川(あもりがわ)」は、船団が到着した地名と思われる。そして、わずかに残る伊賀国風土記逸文によれば、猿田彦命は伊賀国を伊勢国に合わせ二〇万年も統治したと記述する。

参照資料1-12:鹿児島神宮

出典:ウィキペディアから図柄引用

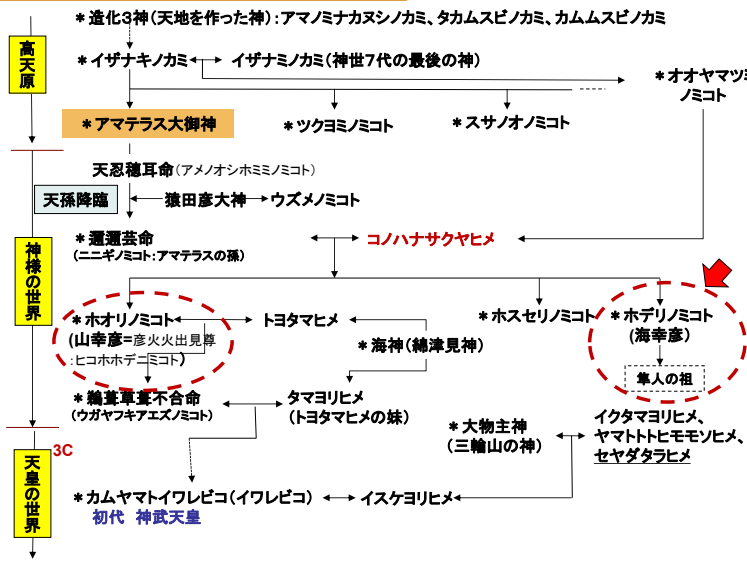


主祭神
彦火火出見尊 (ひこほでみのみこと) (山幸彦)
豊玉比売命 (とよたまひめのみこと)

鹿児島と鹿児島は読みが同音に近い。鹿児島島の由来を調べてみましょう。延喜式神名帳には官幣大社と記載される霧島隼人町の「鹿児島神宮」の「鹿児島」の起源についての説明がされていない(参照資料1-12)。神籠る島がその由来とする説があります。つまり、高天原から来た人々が統治した場所という意味です。一方、「続日本紀」(七九七年)の中の養老七年(七三三年)の記事に「鹿児島」の字が初出する。それ以前の文献では「鹿島」でなく「香島(かぐしま)」と記述される。鹿児島と符合する。当時、人々は船で移動する、鹿児島から鹿児島への航行ルートが存在したと思われる。

鹿児島には隼人と熊襲と呼ばれる人々がいます。隼人は火照命(ホデリノミコト)海幸彦(参照資料1-12)を祖とする書記は記述する。火照命は皇祖神直系の三ギノ命の子神です(意味です。連想されるのは「天乃鳥船」です。地元の人に「鳥のように早く動く」と捉えられたのでしょうか。隼人は軍事用に仕上げられた特別船を使っていたのかもしれません。熊襲も関東の高天原勢力の九州遠征でやってきた人々でしょう。鹿児島にはシ

参照資料1-13: 鹿兒島神宮と隼人の祖神



カが存在し、熊は九州にはいません。関東や東北では熊や猿、鹿など一般的で、鹿踊りなどが岩手、宮城、福島などに伝わっている。熊のいる鹿島からのやってきた人々と結びつくいても不思議ではない。しかし、古墳時代になると、隼人も熊襲も、また関東や九州も、見捨てられた居民となり、また辺境と見なされるようになる。そうして、景行天皇が命じた征討が始まる。まず、ヤマトタケルの熊襲・隼人征伐は、日高見国の旧勢力になつてゐる勢力の鎮撫であらう。

一方、東国の平定を日本書紀の記述では、「蝦夷を平らげられ、日高見国から帰り、常陸を経て甲斐国に至り、酒折宮（さかおりのみや）においでになつた」と記述する。この時、日高見国は東国の一部の国まで縮小していた。国譲りで列島を統一したのも日高見国の勢力、その後天孫降臨で列島を神武東征による古代大和の新体制に組み込み、再統一したのも日高見国の国家統一事業と捉えられる。

参照資料1-14: 鹿児島神宮と霧島神宮

出典: ウィキペディアから図柄引用



コラム: 「鹿児島神宮（大隅八幡宮）」

鹿児島には天皇家に直接関係すると言われる二つの神宮がある。霧島神宮と鹿児島神宮です。霧島神宮は天孫降臨の地に建てられ、主祭神は降臨した瓊瓊杵尊（ニギノミコト）です。鹿児島神宮は主祭神の山幸彦（彦火火出見尊・ヒコホデノミコト）と後の豊玉比売命（トヨタマヒメノミコト）です。共に、官幣大社で明治七年に神宮の称号を得て改号しています。鹿児島神宮の由緒をみましょう（参照資料「一」）。

鹿児島神宮祭神の山幸彦、この神は皇祖神の直系です。兄弟神の海幸彦と山幸彦は釣り針をめぐる兄弟の諍（いさか）いにちなんだ神話で有名である。その時、海神の宮で巡り合ったのが後の豊玉比売です。この両親の孫がイワレビコノ尊、後の初代天皇の神武天皇である。一方、同宮は早くから八幡神を合祀しており、明治までは「正八幡宮」と称していた。八幡神と言えば八幡神の総本山である宇佐神宮の応神天皇と関りが出てくる。この謂れは、

宇佐託宣集は、「日州（日向）の韓国城（韓国宇豆高島）、蘇於峯（そほだけ）は霧嶋山の別号なり。」と記す。韓国城は最高峰に作られた。蘇於峯は霧島連峰の最高峰の韓国岳を指すと述べる。

「大隅正八幡宮縁起」は、「震旦国（中国）の陳大王の娘・大比留女（おおひるめ）は、七歳のとき夢で朝日を受けて身籠もり、王子を生んだ。王たちはこれを怪しみ、母子を空船（うつほぶね）に乗せて海に流したところ、「日本の大隅の磯岸に着き給う。その太子を八幡と号し奉る。……、大隅国に留まりて、八幡宮に祭られ給えり」。母は「筑前国・香椎聖母大菩薩（神功皇后のこと）と現れ給えり」と記述する。とすると、祭神の山幸彦が八幡様の起源になってしまい、宇佐神宮の八幡様とは異なることになる。大隅八幡宮は、元は隼人の聖地の石体宮（しゃくたいぐう）に発する。石体宮は大隅正八幡宮の元宮と言われニギノ尊の子神である、ヒコホデミ尊（山幸彦）の宮居させ給う高千穂宮（高千穂）をそのまま御社殿として奉斎したものとしている。

以降省略

参考図書

- ＋「古事記」(竹田恒泰 学研)
- ＋「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
- ＋「日本の起源は日高見国にあった」(田中英道著 勉誠出版)
- ＋「高天原は関東にあった」(田中英道著 勉誠出版)
- ＋「神武天皇の真実」(田中英道、扶桑社)
- ＋「京都はユダヤ人秦氏がつくった」(田中英道著 育鵬社)
- ＋「なぜ八幡神社が日本で一番多いのか」(島田裕巳著 幻冬社)
- ＋「霧島神宮・鹿児島神宮」(デアゴスティーニ)
- ＋「神社に秘められた日本史の謎」(洋泉社 MOOK) など

おわりに

古代史シリーズ9「大和と平安京を創った人々」の講座は、日本人のルーツを扱ったシリーズ8「日本人の祖先と日高見国」の時代からの継承編になり、田中英道先生の出版物を最重要参考図書としています。先生の認識では、高天原は地上にあり記紀の伝えは事実であるとの確信の下に検証され、記述されているところが画期的です。

古代史シリーズ9は、弥生時代の大和朝廷の誕生から近代国家の平安京造営に大きな役割を果たした秦氏と高天原の神々との繋がりを抑えました。

葦原中国と言われた出雲王国の高天原（日高見国）への国譲り、高天原族のイワレビコ命が神武東征で大和に朝廷の拠点を構える。その大和では、イワレビコの神武東征の前に同じ高天原族のニギハヤヒ命が不完全ではあるが、既に王国を築いていたのでしょう。イワレビコ命はニギハヤヒ命の挙力を得て大和を制していきました。第十代崇神天皇頃には大和が統治されたことで、全国統治へと進み、律令制の下での近代国家平安京が完成しています。この平安京造営の資金的スポンサーとなつたのが膨大な資金を有していた秦氏でした。日本への渡来人は、天皇に対し非常に協力的です。

日本以外の世界では国家の覇権争いの戦いが続いている中で、渡来人が日本人に同化していくような国家を築いていけたのは、日本が自然の恵みの豊かさを持ち、治政の頂点にある天皇の治政が人道的で受け入れ易いものであったのでしょう。

初代神武天皇の「八紘一宇（はつこういちう）」、第十六代仁徳天皇の「天皇は民と共にある」のお言葉、それを皇統の典範とした思想背景がそこにはあったのであろうと思われる。

秦氏は平安京造営後、日本人になり、いろんな産業の職人集団として、その後の産業発展の基盤になったと考えられます。

【著者略歴】 井上正和(いのうえまさかず)

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971 年日本 IBM(株) 入社し SE 部門に配属。1992 年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。

2001 年に独立し、有限会社 情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略や IT 戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011 年 4 月 神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在まで16年間、16シリーズ(各 5 回講座)を開発し、古代史の講座を横浜市地区センターを中心に、学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。今後オンラインでの全国展開を計画している。

古代史シリーズ9「大和と平安京を創った人々」

発行日 令和7年9月吉日 初版発行

著 者 井上 正和

発行所 有限会社 情報戦略モデル研究所

〒226-0006 横浜市緑区白山2-2-E-216

TEL:045-934-7254

URL: <http://www.ism-research.com/>

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

●本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。

お問い合わせ: ism.researchbook@gmail.com

ISBN 978-4-9912583-9-8
C1021 1000E

発行: 情報戦略モデル研究所
価格: 本体価格 1,000 円 + 税

ISM
研

主な内容
はじめに 第1章 「国譲りと天孫降臨」 第2章 「神武東征の解釈」 第3章 「饒速日命・神武天皇・崇神天皇」 第4章 「秦氏が平安京を創った」 第5章 「秦氏と京都の神社との繋がり」 おわりに